SONRISA

そんりさ

Vol.130

中米に広がるナルコ

1995 年大統領選挙の新グアテマラ民主戦線 (FDNG) の集会。フアン・レオン氏が副大統領候補として立候補し、ロサリーナ・トゥユク氏が国会議員に選ばれた

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

2 東日本大震災を受けて ：レコム運営委員会
3 中米に広がるナルコ ：翻訳ワークショップ
7 先住民族と協同製作の映画「少年の夢」 ：溝口　尚美
8 グアテマラ「希望を育む女性協会」支援報告 ：石川　智子
10 アンデス民話「ワイナポトシの伝説」 ：栗原　重太
12 音楽三昧♪ ペルーな日々 ：水口　良樹
14 メキシコ食巡り ：ミゲル・アクーニャ
15 ニュースクリップ

2011 年 4 月 23 日　日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

東日本大震災を受けて

レコム運営委員会

三月一一日、東北太平洋沖地震に始まる東日本大震災により被災された皆様に、レコム運営委員会として心よりお見舞申し上げます。いまだ強い余震が続いていますが、今般の震災は直接の被災地域が広範囲であるだけでなく、福島原発事故も重なり、影響は広域化、長期化することからも、日本で暮らす私たち皆が向き合っていかなければならない歴史的な震災だと認識します。

今般の震災に対しては、中米においてレコムがつながってきた友人たちからも、お見舞いと連帯のメッセージを預かっています。来日経験のある活動家では、グアテマラ、コナビグア（連れあいを奪われた女性たちの会）のロサリーナ・トゥユクさん、マリア・カニルさん、ルシア・キラさん、キチェ県のシスター・マルーカさん、ヨランダ・アギラルさん、ヘレン・マックさん、ニカラグアからはミルナ・カニンガムさん、ロス・カニンガムさん。

このほかコナビグア、「希望をはぐくむ女性たち」協会、戦時下性暴力問題に取り組むプロジェクトに参加する女性たち（ＥＣＡＰ、ＵＮＡＭＧ、ＭＴＭ）など、これまでに協力してきたたくさんの人たちからも、日本の仲間たちの無事と安全、原発事故が大事にいたらないこと、そして早い回復と平和を祈る、という連帯の言葉をいただいています。

また、この三月中旬はちょうどレコムの視察チームがグアテマラ滞在中でしたが、通りやお店などでも地元の人たちから温かな声をかけていただきました。

ところで震災の影響を踏まえると、レコムの今後当面の活動について、例えばイベント開催や物販など、影響や制約が出てくることも現実的に考慮する必要があるとも考えています。ただその中でもレコムとしては、これまでのグアテマラをはじめとしてラテンアメリカの人々とつながり続ける意義を再確認し、これからにつながる活動を続けていきたいと考えています。

実際、レコムの直接の関わりで言えば、グアテマラの人々が内戦や自然災害の中から立ち上がり生活と共同体の再建に向かう姿に共感し、逆に私たち自身も勇気を受け取ってきました。あるいは日本の（地域）社会を見つめ直すきっかけとなり、地域で新しい生活や活動を始めているメンバーもいます。今回、東北という地域的背景もありますが、地域のつながり、地域間の共同などがあらためて注目されています。また原発震災を前に、エネルギーのあり方、都市と農漁村の関係性など、いわば開発（発展）モデルに関わる課題にも今後私たちは向かい合うことになると考えられます。

アルゼンチンでも連帯の動き

アルゼンチンでも日本への連帯の動きがあります。軍政時代の行方不明者らの母親たちが真相解明を求める活動について、以前に本誌で紹介された井上薫さんが、現地紙「パヒナ・ドセ」の三月一九日の記事を和訳してレコムに届けて下さいました。

記事の和訳や井上さんの説明によると、日系アルゼンチン人や同国在住の日本人らの呼び掛けで、三月一八日の夕暮れ、ブエノスアイレスの広場で集いが開かれました。「Ｆｕｅｒｚａ Ｊａｐｏｎ（がんばれ日本）」の声を上げるためです。呼び掛けたのは日本と関係の深い機関や大学の関係者、文化人ら。日の丸を顔にペインティングした若者たちが折り鶴を配るなどして連帯をアピールしました。義援金を集める活動を続けていくとのことです。

日系人行方不明者の家族の会会長のエルサ大城さんも中心人物の一人。行方不明者問題に対する日本からの連帯に感謝していた彼女は「今度は自分たちが日本の人たちと連帯するのだ」と語りました。

また、ブエノスアイレス大学の日本語学習の

コーディネーター、ガブリエラ・オッチョネーロさんは「若者たちは武術やアニメなどで日本の文化や言語に関心を持ち、それが日本での悲劇に対する身近な感情につながった。日本の文化に根付いた他人への思いやりが、若者たちを今回の行動にいざなった」と話しています。

参加者の中には、二〇〇一年の同国の経済危機で家を失い、息子さんが日本に出稼ぎに出ていて、原発事故の避難区域で被災したという日系人もいます。

日ア学館文化センターのコーディネーター、デリア三井さんは「日本の人々と、日本に住むアルゼンチン人たちに勇気と気力を送りたい」と集会の趣旨を説明。その様子はビデオ映像にまとめられ、日本のテレビ局に送るそうです。映像はユーチューブ（http://www.youtube.com/watch?v=VGPI9Pr78Ao&feature=youtube_gdata）で見ることができます。前半は被災地の人々の姿、後半にアルゼンチンの人々の姿が収められています。

中米に広がるナルコ

メキシコの麻薬問題「ナルコ・メヒコ」特集第二弾、今回は中米に広がるメキシコ麻薬カルテルの影響についての記事二つの翻訳です。メキシコのカルデロン政権は米国の援助による麻薬密輸撲滅作戦メリダ・イニシアティブを開始して、対麻薬戦争を激化させています。それにより、メキシコのカルテル、特にロス・セタスが中米に麻薬ルートを開拓してどんどん侵出しています。

特にグアテマラはメキシコと国境を接しており、ペテン県のジャングル地帯などで国家の監視の目が届かない場所で麻薬カルテルの一つ、ロス・セタスが軍事訓令をしたりしています。ロス・セタスはメキシコ国軍特殊部隊の一部が麻薬密輸に乗り換えて急激に大きくなった組織で、とりわけ残虐であることで知られています。グアテマラの特殊部隊カイビレス（グアテマラ内戦中はその残酷な弾圧で悪名をはせていました）とも強いつながりを持っています。

このような状況のもと、グアテマラ政府はその取り締まりに有効な手段をうつことができずにいます。事態を打開するために、政府は昨年一二月と今年一月の二カ月にわたってアルタベラパス県に非常事態宣言を出しました。が、情報が漏れていたらしく、摘発が始まった時には大物はすでに逃げた後で、はかばかしい成果がなく終わりました。また、非常事態宣言はアルタベラパス県のみだったのですが、メキシコとの国境を接する他の県（ウエウエテナンゴ県、キチェ県、サンマルコス県）などはその対象外であり、その点でもこの作戦を疑問視する声が多いようです。ちなみに、レコムが支援する「希望をはぐくむ女性たち」協会の活動の中心であるキチェ県サカプラスも、ロス・セタスの麻薬密輸ルートになっており、近年それにかかわる犯罪事件や衝突事件が頻発しているということです。

一方エルサルバドルは、若者ギャング組織マラスが大きな勢力を持っている国ですが、ここでもメキシコの麻薬カルテルの影響が大きくなっています。さる三月に米国のオバマ大統領が中南米を歴訪しましたが、中米で唯一オバマが訪れたのがこのエルサルバドルでした。麻薬対策は、組織犯罪、米国への移民流入と並んで中心のテーマの一つであり、オバマは中米の麻薬対策に百億ドルを拠出することを表明しました。これに対しエルサルバドルのマウリシオ・フネス大統領は、米国での需要（麻薬消費）も

問題である、と釘を刺す場面もありましたが、単に巨額をつぎ込んで軍事的に抑えようとするだけでは問題が解決しないことはコロンビアやメキシコの例をみるまでもありません。

グアテマラの新たな敵は麻薬密輸

フリアン・ミグリェリニ（ＢＢＣワールドニュース）

震災、内戦、ハリケーン、政治危機……激震に馴染んだかさえに見える国グアテマラは、現在新たな敵、麻薬カルテルに揺さぶられている。

麻薬密輸はグアテマラにとって新しい現象ではない。地理的な位置に加えてメキシコとの国境には無数の抜け道があるため、当国は米国に向かう麻薬の恰好の中継地となってきた。

が、今日懸念されるのは、組織として強大に発展し、巧みな手腕や動員力をもつメキシコの麻薬カルテルのいくつかが、部分的に活動拠点をグアテマラへ移す決定をしたと様々な情報が伝えていることだ。

「麻薬の暴力は（メキシコ―グアテマラ間の）国境を越えつつある。それはメキシコ政府の強硬な対抗姿勢を受けて、悪名高いロス・セタスをはじめとする組織が南へと押し出されているからだ」と米国国務省は二〇一〇年初めの報告書でそれを肯定している。

それは世界で最も暴力的な国のひとつに数えられるグアテマラで、更に恐怖が深刻化するということだ。

グアテマラでは、人口一〇万人当たりの殺人件数が五二件に上る。これに対しメキシコでは一四件、アメリカ合衆国では五・四件である。

上記の数値は、国連のデータがこれらの殺人事件のうち九五％は何ら処罰を受けていないと指摘するのを考慮すると、ますます懸念を深刻にさせる。

それに加えて、各種指標に示されるグアテマラの貧困状況、また一九九六年の終結を見るまで三〇年以上にわたり武力が行使された内戦の歴史が残した社会的影響は、組織犯罪に若者が非常に巻き込まれやすい条件を呈している。

つまり、グアテマラには最悪の事態が起こる条件が揃っているということだ。政府がとてつもない危機に直面していることは疑いない。

「我々は、この侵略に立ち向かえる筈だ」。アルバロ・コロン大統領はＢＢＣワールドニュースのインタビューに対し、こう断言した。

「軍隊」

米国政府の推定によると二〇〇八年と〇九年の間にグアテマラ国内における麻薬の押収量は倍増し、それは麻薬密売活動がいかに盛んになったかを反映するものと見られている。

だが、これらの新たなグループの出現は社会現象としてもますます顕在化している。

メキシコとの国境に近いアルタベラパス県、ウェウェテナンゴ県及びペテン県などの地域では、「大口径の銃で武装した男たちの軍が現れ始めている」とＮＧＯサバイバー基金（Fundación Sobrevivientes）のノルマ・クルス氏は言明する。「これらの地域にはもともと麻薬取引があったが、いまやメキシコ系組織がグアテマラの組織の縄張りを荒らしているため、麻薬カルテル同士の間で数々の紛争が起きている」と付け加えた。

これが意味するのは暴力の増加だ。〇九年には、近年のグアテマラにおける暴力による死亡者数の記録が更新された。

昨年はその数が若干減少したものの、暴力そのものの有様には変化がうかがわれる。ＮＧＯ相互支援の会（Grupo de Apoyo Mutuo-GAM）は、昨年の一〇月だけで四〇名以上の死者を出した大量殺人事件が一二件起きたと報告している。ＧＡＭによれば「軍事独裁政権時代の後には発生しなかった」タイプの集団殺人である。

専門家らはこれらの大量殺人を犯罪集団の組織的能力の発展に関連するものと言明している。当国政府によれば、国内犯罪の四一％は麻薬密輸に起因するというのだ。

癒着

グアテマラの政府関連機関の機能は、政府官僚自らが認めるほど弱体であるため、麻薬密輸勢力の台頭に対する無防備さは一層深刻である。

「グアテマラ国家の警官の数が不十分で検察省も殆ど機能しない状況で取り締まり体制が弱いので、公権力が及ばない。そこに居合わせたとしても麻薬密売活動に加担して言いなりになるか、従わなかった者が何らかの形で消されてしまう」とクルス氏は明言する。

麻薬カルテルのこれらの機関内への影響力は、地方レベルに留まらず、時に中央の高官層にまで浸透している。

既に国家市民警察の長が麻薬密売とのつながりと汚職を理由に解任・逮捕された。昨年三月には警察の麻薬対策担当の長が同じ処分を受けている。

大統領は、警察内への組織犯罪勢力の浸透は致命的であると述べ、差し当たりグアテマラ政府はその大掛かりな浄化対策に着手した。

同時に現大統領の任期終了までに警察官を三万人とするのを目標に、新規雇用も進められている。

戦略

押し寄せる暴力の波を食い止めるための努力が期待どおりの成果をもたらしていないことを認めつつも、コロン大統領は自身のイニシアチブを弁護し、希望的な態度を見せている。

「私の就任以降、政府は大幅な保安関連予算の投入をしてきた」とBBCワールドニュースに語った。

「我々が警察の改革・司法改革・検察省の強化・警察のプロフェッショナル化を継続して進めれば、この政権および次の政権下では脅威が減少される筈だと私は信じている」

麻薬カルテルによる同国内での活動を阻止しようとする政府の戦略の一環として、グアテマラとベリーズの国境地帯にある熱帯林地域にあたるペテンなどの各地への軍派遣を強化した。

しかしながら、メキシコでされたように麻薬カルテルとの戦いを軍事化させるのは逆効果になりうるのでは、と危惧する声も多い。

「組織犯罪のような大きな敵に挑む戦いでは、国家は二重の意味で試される。ひとつは組織犯罪との戦いに打ち克てるかという問題、そしてもうひとつは法治国家の体制を維持しながら戦えるのかという問題である」とグアテマラの免責に対する国際委員会(CICIG)の現代表フランシスコ・ダラネスは述べる。

「どのような問題に対しても暴力的な解決法に訴えれば、暴力の増大を招くからだ」と警告した。

(訳=石川智香子)

エルサルバドルの悪夢
「マラス」から「ナルコ」へ?

「エルサルバドルは何者にも脅かされない」。胸にそうプリントされたTシャツを、挑戦的な態度で見せつける男。同国内のあちこちで見られる、政府広報の巨大な看板である。

この看板は反暴力キャンペーンのものだが、エルサルバドルの多くの人が、メキシコの麻薬密輸を巡る紛争が飛び火してくるかもしれないと怖れているいま、そこに書かれた文句は、なにか特別な意味を持つようにみえる。

最初に警告の声を発したのは、マウリシオ・フネス大統領自身で、昨年(二〇一〇年)四月のことだった。

大統領は、メキシコのフェリペ・カルデロン大統領の「対麻薬政策の成果で」、メキシコの麻薬カルテルが密輸のための新しい基地を探しており、「偵察のためにエルサルバドル領内に入ってきたという情報がある」と述べた。

それ以来、セタス(メキシコの麻薬カルテルのひとつ)のような犯罪組織がエルサルバドル領内で活動を展開していないかどうか、マラスや地元の犯罪グループと共謀していないかどうか、公安当局は注意深く調査してきた。

「メキシコ経由でアメリカ合衆国に至る麻薬密輸ルートで、麻薬や現金の移送に協力させられていたり、あるいは自ら密輸を行っている犯罪グループがあるという情報がすでに入っている」とエルサルバドルに本部を置く「反犯罪組織地域センター」のダグラス・ガルシア・フネス代表は述べた。

さらなる暴力か？

エルサルバドルは、真偽はともかく、世界で人口当たりの殺人件数が最も多い三つの国のひとつであると言われている。その暴力の大部分は「マラス」の存在によるものだ。マラスとは、一九八〇年代にロサンゼルスにおいてエルサルバドル人移民を中心として作られた犯罪グループである。

そのメンバーの多くが本国送還になったことで、マラスはエルサルバドルで勢力を広げ、今や国の治安を脅かすもっとも深刻な問題となっている。

ある推計によれば、同国では、約一万五〇〇〇人の若者がどこかの犯罪グループに属しており、家族によってはすでに、構成員が三世代目になっているという。

エルサルバドルのいくつかの地域には、マラス構成員が支配する領域があるが、メキシコのカルテルがもし来た場合、マラスが彼らにどのように協力するのか、あるいは対立するのか、まだわからない。

さらに二〇一〇年六月に起こった事件は、犯罪グループに対する国の政策が失敗していることを如実に示している。

首都のある地区で、犯罪グループが満員の乗客を乗せたマイクロバスに放火したのである。この事件で一七人が焼死し、政府は「これはテロ行為だ」と呼んだ。

その後すぐ、マウリシオ・フネス政権は厳しい「反マラス法」の制定を推進した。これは、単に犯罪グループに属しているだけでも罪に問われ、またゆすりによる彼らの資金調達も犯罪として処罰できるというものである。しかしこの法律は、その適用範囲を巡る政治的論争により、まだ完全には施行されていない。

一方、現政権になってから、軍全体の約半分に当たる六〇〇〇人以上の兵士が、国境に通じる道路から、刑務所、多数の犯罪グループが存在する地域まで、国内のさまざまな「重点的」地域に配備された。

政府の姿勢がこのように強硬になったのは、メキシコの麻薬密輸マフィアが国内で目立つようになったため、それに対抗するための準備だと多くの人は考えている。

「そのような危惧があるのは確かだ。だが我々が行おうとしているのはあくまでも予防策である」とエルサルバドル外務大臣ウゴ・マルティネスは述べた。

残虐さを極めるマラス

エルサルバドルで暴力の最たるものをもっともよく目にしている人物は、おそらく同国検察庁の法医学者イスラエル・ティカスであろう。彼は、犯罪グループによって殺害され埋められた秘密墓地から犠牲者の遺体を発掘することを担当する、唯一の役人である。彼はすでに国内で三八か所の秘密墓地を発掘している。

首都にある彼のオフィスには、おぞましい現場写真が至るところに貼られており、それらは一般の訪問者には直視しがたいほどの残酷さだ。

遺体は拷問され、首を切られ、切断されている。マラスの犠牲者が示す暴力の激しさには、身の毛がよだつほどだ。そしてその残虐さはますますひどくなってきている。

ティカスは、犯罪グループが犠牲者の遺体を埋めるそのやり方において、「近年、手が込んできている」という。

「死体の隠し方がさらに巧妙になり、さらに見つけにくくなった。今では切断した体を捨てた場所から五キロも離れたところに頭部を捨てたりするのだ」

メキシコのカルテルがエルサルバドルにやってくることで、これほどの暴力がさらにひどくなるなど、想像もできないほどだ。それゆえ、マラスとナルコの組み合わせは、国内の多くの人々にとって、悪夢が現実となるに等しいものだろう。

（訳＝山本昭代）

http://www.bbc.co.uk/mundo/noticias/2010/12/101216_maras_salvador_violencia_cr.shtml より

先住民族と協働製作の映画「少年の夢」

溝口　尚美

短編映画「少年の夢」は、南米コロンビアの「ナサ」という先住民族の精神性を描いた物語だ。約五〇〇年ぶりに火山活動を始めたウイラ山と、その前に人々が実際に見た夢をモチーフにフィクションとノンフィクションを織り交ぜている。私が共同運営している団体「Cineminga（シネミンガ）」が、当事者であるナサ民族の人々と協働で少しずつ制作を始めた。二〇一一年二月、「少年の夢」が東京の恵比寿映像祭で上映され、同時期に、ここに執筆する機会を得た。徒然なるままに映画制作のエピソードなどを書いてみたいと思う。

シネミンガは、ニューヨークに拠点を置く若い非営利団体である。世界の先住民が、自分たちでメディアを使いこなし、その声の発信を可能にする事、そして交流のプラットホームになる事を目的としている。映像制作を生業にしてきたカルロス・ゴメスと私が二〇〇八年に共同設立した。その前年の二〇〇七年、カルロスは初めて、自分の故郷でもあるコロンビアのナサ民族のコミュニティを訪れた。カメラは持って行かずに一緒に生活し、ただ話をしたり、お酒を呑んだりして、お互いを知る為にナサの人々と時間を過ごした。当時、人々は火山活動による地震や土石流で多くの人が亡くなり、故郷を離れ、高台にある「タフヌ」という地域で避難生活を送っていた。

何度目かの訪問で、「少年の夢」の企画が動き出した。脚本・撮影・編集、全てをナサ民族の人々が中心で行う事とし、出演者も現地の人に決めてもらった。普通の映画制作では、ディレクターやプロデューサーがリーダーとなって、プロのカメラマンや録音マンなどのスタッフを連れて現地に出向き、ディレクターの意向で制作を進めるが、シネミンガは、現地の人々の視点で一緒に制作を行う所が特徴であり大きな違いである。私達プロは、できるだけ技術指導に徹している。

「少年の夢」の撮影風景

さて、「少年の夢」はどんな映画なのか？物語は、ごく普通の朝のシーンで始まる。家族は、火を囲んでパネラ（さとうきびを溶かした熱い飲み物）を飲みながら、「ゆうべ、どんな夢を見た？」という会話をする。ある日、少年が見た夢は、おじいさんとおばあさんが「もう押さえきれない」と、蒸気を押さえているものだった。夢の意味を知る為に、少年はメディスンマンの元へ行く。それは地域を見守る火山から人間へのメッセージだったのだ。これをドラマ（フィクション）で撮り、更に、ドキュメンタリーを加える事にした。

二〇〇八年一二月、初めて私はナサ民族のコミュニティを訪れ、三ケ月程滞在し、ビデオワークショップを行い、映画制作に参加した。出発前、日本で知人に向けて、中古のビデオカメラやコンピュータの寄附を募ったら、五台のビデオカメラと二台のパソコン、三脚、それに写真用のデジカメがいくつか集まったので、持って行った。現地に置いて行く為だった。そのビデオカメラを使って、二〇一一年までの間に、ナサのメンバーは何かがあるたびに撮影をしていった。火山の様子、タフヌでの避難生活、次なる土地への移動、土地返還運動などが、私達が居ない間に撮りためられた。

ある時、子ども達が次々に病気になり、死亡

者も出た。シネミンガのメンバーの一才の男の子も亡くなった。政府軍がやってきて、地域の水源にゴミを捨て、排便をし、汚染された水を子ども達が飲んだせいだった。政府軍・ゲリラ・パラミリタリーが関わる内戦の為に、人々の生活や自然が侵されている事実は、とても一言では語れない。火山の警告は、こういった生活をしている人間に対するものだ。これらの事実を、ドキュメンタリーとして織り込まなければ「少年の夢」は、単なるファンタジーで終わってしまう。そんな想いがフィクションとノンフィクションのミックスというスタイルを生んだ。

恵比寿映画祭に間に合わせる為に、編集は、かなりの駆け足になってしまった。原語であるナサ語から、スペイン語～英語～日本語という翻訳作業にも時間を取られた。シネミンガは、外部に向けての上映よりも、コミュニティでの上映を大切にしている。コミュニティの人が納得したものでないと意味がないと考えるからだ。ただ今回は、コミュニティ上映会をして再編集する時間が無く、日本語版のテープをフェデックスで東京に送り、ナサ語版をナサのメンバーに託してコロンビアを出国した。

シネミンガは、これまで三本のビデオを制作した。それらを地域の学校でナサ語やナサ文化の教育に使ってもらいたい。学校で「教材がなくて困っている」という声を聞いて出たアイデアだ。目下の目標は、ナサ民族が通う全ての学校の為に、数百のＤＶＤを作り、寄附する事である。

グアテマラ基金報告

「希望をはぐくむ女性たち」協会への支援活動

石川　智子

グアテマラ基金による今年の現地活動支援は、キチェ県の「希望をはぐくむ女性たち」協会（以下「希望」協会）に向けられている。昨年九月のレコムによる視察の後、「希望」協会との協議を経て活動内容で合意、すでに活動がスタートした。昨年のアガタ台風被災者への緊急支援を別として、レコムと「希望」協会の協力関係による初めての活動である。

レコムからの提案（二一八号グアテマラ視察報告参照）

昨年九月の視察では、「希望」協会の活動意義を再確認すると同時に、組織として今後強化していくべき多くの点にも気づかされた。

シスター・マルーカが中心となって一〇年ほど前に始めた活動により、女性たちは権利について意識を高め、またマヤ女性としてのアイデンディティを認識すると同時に、生産活動による生活改善と村レベルのグループ活動を強化してきた。多くの女性が自分自身の変化に気づき、自信を持ち始め、各村でリーダーが育っている。各グループは定期的にミーティングを持ち、リーダーが村の外で受けてきた研修の内容を共有したり、グループの活動について話し合って、実施している。

また活動の持続性を確保するために五年ほど前から協会という形を整え始め、グループリーダーの中から協会の運営委員八名が選出された。運営委員は毎月会議をもち、また各グループを時々訪問してサポートしている。

このように、各村のグループがリーダーを中心として独自の活動やミーティングを行い、運営委員がこれをサポートしつつグループ間をつないで活動しており、当初シスター・マルーカ一人の力に頼っていた状態から大きな発展を遂げていると言える。

しかし一方で、協会という組織の管理・運営に関してはシスター・マルーカも運営委員の経験がなく、会計処理、名簿作成、活動記録など

がほとんど整えられておらず、その必要性について認識さえされていない様子だった。視察後、こうした点の強化を「希望」協会への提言として残した。

協力を巡る「希望」協会との協議

会計帳簿や領収書を揃えることの必要性について、はじめは「私たちがお金をごまかしていると疑っているのですか」という声まで上がった。「希望」協会の女性たちの間では相互の強い信頼関係に則り、書記によるノート記述と各自の記憶を共有することで、彼女たちにとっては何の不足も感じていない。支援を正しく実施しているという自負がある。

その後の協議で、会計や活動記録などのアドミニストレーションを強化しなければ、報告義務のある資金援助を受けることはできず活動が先細りになる心配があること、同時に協会の運営委員は会員に対して活動を説明する義務があり、そのためにも記録が重要であることなどを踏まえ、組織強化のアドバイザーや、文書管理のサポーターを探すことなどを提案した。「希望」協会運営委員内では、面倒な報告を求められるような資金援助を受けてまで活動を展開していくのか、緩やかな条件の寄付のみを受けて細々とでも続けていくのか、という話し合いもなされたようである。

同時にレコム側では拡大運営委員会等の場で、「希望」協会の組織強化の必要性が再認識され、どのような形で貢献できるかについて話し合われた。

結局今年一月になって「希望」協会から正式な支援要請を受け、レコムの協力で実施する活動概要を次のように定めることで合意した。

二〇一一年「希望」協会組織強化プロジェクト

一　運営委員（八名）の活動経費

・グループ訪問＝運営委員が全一四グループを年に二回ずつ訪問することになっている。（一月から十月の間で一回目、十一月から十二月の間で活動評価のために二回目。）どのグループを訪問するにも、公共交通機関が整備されていないので、マイクロバス等を雇わなければならない。

・運営委員会参加＝毎月一回の運営委員会に出席するためのバス代。

二　運営委員強化のための研修ファシリテーター謝金

・年に五～六回（各回二日間）運営委員向けの研修を実施する。内容は、戦略計画や活動計画の作成について。

・ファシリテーターは、キチェの女性司牧会やカリタスでしばらく働き、「希望」協会のグループを含めこの地域の女性たちと活動した女性。

三　一グループの生産活動支援

・他のグループと比較しても状況の厳しいサン・フランシスコ農園内のグループ一八名の生産活動支援を通して、生活状況の改善を図る。昨年も別の支援を受けて一人当たり一三〇ドル程度の資金を提供したが、まだ十分ではないので再度同様の支援を行う。

四　文書管理のためのアシスタント雇用

・会計処理、名簿作成、活動内容の情報整理など、文書管理を担当してもらう。必要があれば運営委員のグループ訪問にも同行して、その内容を記録し、整理してもらう。

・アシスタント候補は、「希望」協会の奨学金プロジェクトの支援を受けて卒業した若者たちの中から探すこととする。これにより若者が協会の活動をより深く理解すると同時に、勉強で習得した技術を実践で使える場を開くことにもつながる。

協力に関する合意事項

一　「希望」協会は活動終了時に、活動報告と全支出の領収書を添えた収支報告をレコムに提出する。レコムのデレゲーション訪問時には、会計書類を確認する。

二　「希望」協会は、メンバーリストを作成し、随時更新する。レコムはその提出を求めるものではないが、必要に応じてこれを確認する。

三　レコムからの支援金は前期・後期に分割して、「希望」協会の口座に振り込む。

活動開始

レコムより二月初めに前期分の支援金を「希望」協会に振り込み、活動はスタートした。早速二月一五日には第一回の運営委員向け研修を実施、組織の現状分析と各自の自己分析を行ったということである。

これらの活動を通して、特に運営委員の組織運営やアドミニストレーション能力が強化されることを期待するが、同時にレコムとの関係を一つの経験として、外部協力団体から受ける支援に対して、どのように応えていくべきかを検討してほしい。

三月後半には、レコムのデレゲーションが活動の進捗を視察する予定であるが、今号「そんりさ」には間に合わないので、後日報告させていただくこととする。

彼女たちは、希望をはぐくむ女性たち。活動に参加するうち、気がついたら自分が変わっていた。以前は人前で話せなかった、自分には何も出来ないと思い込んでいたのに、今は皆の前で意見を言ったり、育てた家畜や作物を売って資金を増やすことができた。この資金を今度は何に使おう?こんなふうに、やっと希望を持ち始めた。周囲の女性たちにも変わってほしい、声をかけ、仲間が増える。希望が増える。

活動の中で、自分たちの力が足りないことに気づいたり、時には他の女性たちと理解し合えずに泣いたりしながらも、もっとたくさんの女性たちと希望をはぐくむために、組織強化という新しい挑戦を始めている。この女性たちの思いを大切にしてサポートして行きたい。

アンデスの民話シリーズ

ワイナポトシの伝説

ラパス市の東側には、イジマニ、ムルラタ、ワイナポトシ、イジャンプなどの、雪を頂いた山々が並び立っています。

遠く西方、チリとの国境にはサハマ山がそびえ立っています。

これらの五つの山々にはひとつの伝説があります。

原本　ワイナポトシの伝説　サン・ガブリエル　ラジオ放送　1989
LEYENDAS DEL HAYNA POTOSI　RADIO "SAN GABRIEL" BIBLIOTECA DEL PUEBLO AYMARA 1989

その昔、ワイナポトシは一人の若者だったと言います。

若者は、ベルニータと言う名の美しい金持ちの娘に恋をしました。

娘には、ムルラタ、イジマニ、イジャンプ、サハマの四人の兄がいました。

ある日若者は、糸を紡いでいるベルニータを見ると近づいて言いました。

「ベルニータ、君がとても好きだ、僕と結婚しよう。」

「兄たちがうんとは言わないわ。」

「お兄さんたちには、僕から話すさ。」

そう言って若者は、ベルニータを自分の家に連れてゆきました。

ムルラタ、イジマニ、イジャンプ、サハマの四人の兄たちは、妹がワイナポトシと一緒になったのを知ると、とても腹を立てました。

四人は妹とワイナポトシにわけを正すために、

一羽のコンドルを呼びにやりました。
コンドルはワイナポトシを見つけると言いました。
「ワイナポトシ、ベルニータの兄たちはお前たち二人が一緒になったのを知って、とても怒っている。二人ともすぐに来てわけを話せ、といっている。」
ワイナポトシはベルニータに言いました。
「お兄さんたちは、僕たち二人を連れて来いと言って、コンドルを使いによこした。一緒にお兄さんたちの所へ行こう。」
「いやよ、兄たちは怒って私たちを殴るに決まっているわ。あなた一人で行ってらっしゃい。」
ベルニータは、兄たちを恐れて行くのを断りました。

ワイナポトシは一人でベルニータの兄たちの所に行きました。
兄たちは一人ずつワイナポトシに問いただしました。
「どうして一人で来た。」
「お前は本当に心から妹を愛しているのか。」
「どうやって妹を養うんだ。」
「どうしてベルニータを俺たちに黙って連れ出したのだ。」
ワイナポトシは答えました。
「そんなに怒らないでください。生活の準備は大丈夫です。
家には金銀もたくさんあります。仲人には、スマックオルコ山をたのみました。ソンゴの地には、野菜も果物もふんだんにあります、家畜もたくさんいます。」

三人の弟たちは、ワイナポトシの言葉に納得しました。
しかし、長男のムルラタは怒りを収めることができません。
「ワイナポトシ、今すぐに妹を連れて来るのだ。」
「ベルニータは怖がって来たくないといっています。」
「なんで怖がる必要がある。俺はおまえたち二人と話したいんだ。」
ムルラタはますます腹を立て、ワイナポトシにひどくばかにした言葉を浴びせつづけました。ひどく見下され、ワイナポトシもとうとう怒りだしました。
ワイナポトシの怒ったのを見たムルラタは、
「若造のくせにずいぶん生意気なやつだ。よし、どっちが強いか俺とお前で勝負してみよう。逃げるなよ、今すぐにインカたちを呼んで来るからな。」
ムルラタはワイナポトシを挑発しました。
インカたちの助けも借りました。
ワイナポトシも負けてはいません。
「よし、俺だって負けるものか。」
とうとう戦いが始まりました。

ムルラタはワイナポトシに飛びかかり、こぶしで殴りつけ、足で踏みつけました。
三人の弟たちもムルラタに加勢して、ワイナポトシを殴りつけました。
ワイナポトシはひどく負傷しました。
傷ついたワイナポトシは最後の力をふりしぼり、投石器でもってムルラタをめがけて、力一杯石を投げつけました。

頭に石を投げつけられたムルラタは、血を流してその場に倒れました。
戦いはワイナポトシの勝利に終わりました。
ムルラタの死んだのをみた三人の弟たちは、涙を流しながらすぐさま兄の遺体を運び出し、埋葬しました。
ムルラタの頭は、ビアッチャ市の近くの、パン・デ・アスーカル山に埋葬しました。
心臓はイジマニ山の近くの、カスティージュマという場所に永久に埋葬されたと、伝えられています。

はたして、ワイナポトシはベルニータと結婚したのでしょうか。
それはなにも伝えられておりません。
この出来事の後、サハマは他の兄弟たちと遠く離れ、マリヤ・アナジャクチ山と結婚したとも伝えられております。

訳＝栗原重太

音楽三昧♪ペルーな日々（第39回）
「クンビア・ペルアナの黎明」

最近、静かにクンビアがブームになっているという。本場コロンビアだけでなく、ラテンアメリカ各地のクンビアも取り上げられていて、わりと輸入盤が手に入りやすい、というだけではなく、日本盤まで出てきているというから重ねてびっくりだ。そして何よりびっくりなのが、ペルーの「チチャ」に代表される様々なクンビアにも熱い視線が注がれているということだ。ラテンアメリカ広しといえども、ペルーのクンビアほどへっぽこでハイブリッドなものはない。その愛すべきクンビアたちがダサさと奔放さが野放しになった音楽市場の中で、ディープに発展してきたのがペルーだ。そこにこにわかにクンビア・ブームの到来。しかもルーツ・オブ・チチャなんてコテコテのオムニバスが好評だそうで、一昔前には本当に考えられない状況で、未だに信じられない気持ちでいっぱいです。でも、実はじわじわと嬉しかったり。

コロンビアで生まれたダンス音楽クンビアがラテンアメリカで広く流行したのは一九六〇年代だ。以来、各地で土着化し、その土地々々のクンビアを産み出してきた。その中でペルーは、ラテンアメリカ内で大きな影響を持ち続けたクンビア大国だと言える。

ペルーのクンビアは、その時代や地域、担い手によって様々なスタイルが混在した「複数形」のクンビア大国だ。それはそのままペルーが多民族、多文化国家であることの鏡でもある。またクンビアはその音楽の特徴として、各地で土着化した後ローカルなスタイルが生まれやすい音楽だ。しかしことペルーに関しては、クンビアとは全く異なる音楽まで「クンビア」と呼ばれ、その範疇へと躊躇なく取り込まれていった。明らかに異なるリズム、異なるメロディ、異なる楽器、踊り、なんでもありだ。それがペルーのクンビアの真骨頂であり、特殊性であると言える。

クンビアがペルーに入った六〇年代、ペルー沿岸地域に位置する首都リマは、徐々にアンデスからの移民が増加し、折しもアンデス音楽の黄金時代が始まった頃だった。また沿岸部白人層の民衆音楽ムシカ・クリオーヤも新しい音楽要素を貪欲に取り込みながら盛り上がっていた時代であり、ペルーの音楽市場は活気に満ちていた。外来音楽であるキューバ音楽やメキシコ音楽、メレンゲ、マンボ、ロックなどが幅広く聴かれる中、クンビアの流行は瞬く間に首都のみならず地方都市まで広がっていった。

一九六六年、ロックのテンポ感とクリオーヤ音楽のギター奏法、アンデスやアマゾンのメロディーをクンビアのトロピカルなリズムに取り込んだ「ペルー・クンビアの父」エンリケ・デルガード率いるロス・デステージョス＝写真上＝が結成された。リマで生まれた彼は、ギターの才能が認められ、幼少からアンデス・フォルクローレの女王パストリータ・ワラシーナのギタリストとして国内を巡業した。また十代後半にはクリオーヤ歌謡の女王ヘスス・バスケスやマリッツァ・ロドリゲス、ルイス・アバント・モラレスなどムシカ・クリオーヤの名だたる歌手のギタリストを務め、自身もロス・トロバドーレス・デ・ノルテで活躍した。二〇代に入るとキューバ音楽のオルケスタやロックのバンドを組み、その他メキシコ歌謡まで演奏した。そん

な彼の豊富な音楽経験が、ペルーのハイブリッドなクンビアの魅力の原点となった。実際、ロス・デステージョスを聴いてみると、すでにアンデスやアマゾンだけでなく、ブラジルやエクアドル音楽の要素が見事に取り込まれており、九〇年代以降に花開くテクノクンビアやクンビア・ノルテーニャの原点を見る（聴く？）ことができる。テケテケのエレキギターにトロピカルなティンバレスという編成は、後にキーボードを加えてますます発展していくことになる。このロス・デステージョスの影響を受けて、リマ近郊の若者たちは数多くのクンビア・コステーニャのバンドを結成した。ロス・ディアブロス・ロホスやロス・パキネスに代表される新しいペルーのクンビアは沿岸部で人気となった。

また六〇年代末より、コロンビアやブラジルにも接するアマゾン地域の都市プカルパやイキトスなどで、アマゾン先住民音楽やブラジル音楽の要素を取り込んだファネコ・イ・ス・コンボ＝写真＝やロス・ミルロスなどのクンビア・アマゾニカの新たな潮流が生まれた。リマまでその人気が届いたものは決して多かったわけではないが、アマゾン地域のローカル・クンビアでありながら、中にはアルゼンチンのヒットチャートにランクインするものも出るなど、様々な面白い試みを行ったグループが輩出された。特にこのクンビア・アマゾニカは、アマゾン先住民の先住民性を積極的に取り入れようとしたように思われる。それは曲のメロディラインや曲名、時に衣装などにも現れる。九〇年代のテクノクンビアがきらびやかな羽の衣装でアマゾンのステレオタイプを強調したのに対し、七〇年代のクンビア・アマゾニカは、先住民の泥染めの衣装や音楽性、呪術的世界観などでアマゾン性を強調しようとしたのではないだろうか（それをクンビアで、というのがまた不可思議で面白いところなのだが）。

また、七〇年代は、ベラスコ将軍によるクーデターでペルー革命政権が国内文化振興政策を取っており、外国音楽が六〇年代や八〇年代と比べると流通しにくい環境にあったことも、個性的なグループがより多く現れたことと関係があるかもしれない。ペルーの国風文化ならぬ、国風クンビアはベラスコ政権の鎖国によって生み出された、というのは明らかにちょっと妄想が入ってはいるが、ともかく、この時代の混沌としたやりたい放題なクンビアに日本のブームを支えているクンビア・リスナーのみなさんも魅力に感じているようだ。

サイケデリックでサーフ・ロックな要素満載のよくわからない音楽というのが日本のペルーのクンビア・ブームのペルーのチチャ・イメージのようだが、実際ロックの流行とエレキギターの普及がもたらした影響は非常に大きかった。六〇年代以降様々なバンドが数知れず泡沫のように現れては消える中、同じような試みをクンビアと融合させながら進めて行ったのがペルーのクンビアの原点なのだろう。それがまさかこんなに国をあげて踊るような音楽へと展開するとはおそらく思いもしなかっただろうが、実際に聴いてみると、その音楽の恐ろしさはよくわかる。だからたとえどれほどダサくとも、この一節聴いたら三日は口づさんでしまうまさに魔性の音楽が、日本で注目される日が来るとは思いもよらなかった。七〇年代後半より本格的に流行するチチャ（クンビア・アンディーナ）へと連なるクンビア・コステーニャとクンビア・アマゾニカ、ぜひその後のチチャ、テクノクンビア、クンビア・ノルテーニャなどと合わせて楽しんでもらえればと思います。これであなたもクンビアから離れられなくなること請け合いです♪

（水口　良樹）

ミゲル先生のメキシコ食巡り

ユカタン風　肉じゃが

CARNE CON PAPAS A LA YUCATECA

●材料（４人分）
・ジャガイモ中　４個
・牛肉薄切り　４００グラム
・タマネギ中　１／２
・トマト大２個か　中４個＞
・Chilli Seasoning（粉末）　半パック（どのメーカーでも可）
・サラダ油　大さじ３杯

●作り方
1）ジャガイモを洗って茹でる。やわらかくなりすぎないように気をつける。皮をむいて１．５センチ角に切る。

2）薄切り肉が長すぎる場合は、食べやすい大きさに切る。
3）トマトを洗って、皮ごと細かく刻む。
4）タマネギを長細く切る。
5）肉を２分間炒め、トマトとタマネギ、粉末のチリを加え、弱火にする。よく混ぜながら炒めて、半カップの水を加え、ふたをする。
6）トマト果汁がわずかに残っている状態になったら、ジャガイモを加えて蓋をして、焦げないように気をつける。
7）トルティーヤかフランスパン、ご飯などといっしょにどうぞ。

おいしくて日本の「肉じゃが」にそっくりなこの料理は、日本に住む人なら、だれもが好きになること請け合いです。

私が子どものころは、トウモロコシのトルティーヤと一緒に昼食の食卓にのぼり、残り物は夕食でも食べました。

ユカタン料理によく使われる、独特のペースト状の香辛料"recado de bistec"を本来は使いますが、日本で入手するのは困難です。粉末のChilli Seasoningを使えばよく似た味を出すことができます。

メキシコで中学や高校の教師をしていたとき、月に二度はこの料理を弁当にもっていっていました。調理が簡単だし、腐りにくいからです。

日本の肉じゃがのようにとてもおいしい料理なので、みなさんも是非試してみて下さい。

ミゲル・アクーニャ　メキシコで中学・高校の英語教師をしたあと、1986年に来日。「FM COCORO」で７年間ＤＪをつとめた。現在、大阪の下町・天満で「メリダスペイン語教室」（http://www.merida-mex.com）を主宰。

ニュースクリップ　2011 年 1~2 月　　まとめ　サザエ

アルゼンチン：世界で最も汚染された川の 1 つ

ブエノスアイレスのエル・リアチュエロ川は、アルゼンチンで最も汚染された川だ。全長 64 ㎞に及び、汚染された泥土や 9,000 トンもの廃棄ゴミが積もり、水銀、カドミウムなどの有害物質による悪臭が鼻をつく。この川の流域には国全体の 15％以上の人々が住み、スラム化している地域も多く、貧困指数は 45% に達し、35% が飲み水にアクセスできない。住民の間では、気管支炎や癌、皮膚病などにかかる人が増えている。乳幼児の死亡率は、ブエノスアイレスの他地域に比べて倍以上高い。裁判所は流域の住民の生活の質を向上することが緊急であるとしている。ごみがむきだしのまま放置され、市当局はゴミの収集サービスを行っていない。

流域地区には 2 万余りの工場があるといわれ、老朽化した重工業が何の管理も対策も行わず、工業廃水を垂れ流している。浄化するための技術がなく、環境整備のためのコストは莫大だ。2008 年に最高裁判所が川の浄化を命じる判決を出し、世界銀行から 8 億 4 千万ドルが川の浄化のために供与された。市当局は 2010 年の 4 ヶ月間で 7 万トンのゴミを撤去したが、スラムに流入する人口は増え続け、ゴミの排出量も増えている。政府は根本的な対策を取っておらず、下水道整備などのインフラ対策は遅れているのが現実だ。

(WWW.BBC.Mundo2011/01/25 より)

パナマ　―――　クナ先住民族気候変動で移住を余儀なくされるか

パナマの先住民族クナは 3 万 5 千人の人口の 9 割がコロンビア国境まで細長く延びるサン・ブラス諸島の 45 の島に住んでいる。準自治地域となっており、独自の言語・文化を持ち、女性は「モラ」と呼ばれる色鮮やかな衣装を身につけている。そんなクナの人々が地球温暖化の影響を受けている。共同体の生活は簡素で、小規模農業と漁業、観光で成り立っており、電気がほとんど通っていない。そんな人々が海水の上昇によってパナマ本土への移住を余儀なくされそうだ。そうなれば伝統的な生活様式や文化が変化してしまうであろう。

サンブラス諸島は白砂と珊瑚礁で囲まれ椰子の木が広がる。強風があれば海水が押し寄せ、道が浸水する。スミソニアン熱帯調査研究所によれば、海面は 1 年間で 2.5 ㎜上昇している。100 年以内にカリブの諸島は海水に沈むだろう。さらに上昇率が高いという研究もある。強風や波浪の度に緊急事態が起こるだろう。カリブ、アフリカ、オセアニアの諸島同盟はカリブ海で海面が 1m 上昇すれば、1 年で 60 億ドル超の被害がでると試算している。クナのコミュニティ・リーダーらがすでに移住の必要性を認識し、共同体が再定住するための資金援助をイギリスを始め海外に求めている。

だが、生まれ育った場所を離れることに抵抗を持つ人も多い。同時に、クナが住んでいる諸島は住む場所が狭くなり、人々は土地を広げるために珊瑚礁を削って埋め立てている。それがサンゴ礁の破壊になり、環境破壊をもたらしてもいる。　(2011/01/30noticiasaliadas.org より)

ラテンアメリカ―――　脱税天国

2000 年から 2008 年にかけて、不正な方法（密輸や脱税など）で取得された金額は世界で 6.5 兆円にのぼる（Global Financial Integrity による）。ラテンアメリカ諸国だけでも、この間毎年 1050 億ドルが法の網をくぐりぬけて行き来している計算になる。そしてこれらのほとんどは麻薬密輸ではなく、多国籍企業や金融機関などによるものだという。違法金融が最も多いのは中国で、次にロシアだが、その次にメキシコがくる。他にベネズエラ、アルゼンチン、コスタリカなど。

ラ米の経済格差は広がる一方で、米国の経済誌「フォーブス」によると、ラ米には 52 人の億万長者がいる。そのうち 30 人はブラジル人だが、世界一の資産家はメキシコの通信ネットワークを持つカルロス・スリム・エルーで資産 74 兆ドル。これはメキシコの国内総生産の 10.2% に相当し、また中米（コスタリカ、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア）全体の国内総生産に匹敵する。その一方で、5 億 9 千万人のラ米人の 3 分の 1（32.1%）は 1 日 2 ドル以下で生活している貧困層であり、人口の高所得者 20% が富全体の 60% を手中にし、低所得者 20% は全体の 3.5% しか持っていない（国連統計）。

(WWW.BBC.Mundo　2011/02/11, Noticias Aliadas 18/03/2011 より)

そんりさ　一三〇号　二〇一一年　一四月二三日　発行

去年の５月から会計を担当している大西です。慣れない会計の仕事に四苦八苦しているうちに、もう決算の時期がやってきました。この間、こちらの事務上のミスで、会費の期限が間違っていたり、会費を重ねて催促したりと、皆様にはご迷惑をおかけした事もありました。でも、連絡が取れて事情を説明すると皆さん快く理解してくださって、本当にありがたく思います。また、面識のない会員の方と電話やファックスで連絡を取ると、その方のお人柄に触れる事ができて暖かい気持ちに満たされたりするのです。…と、そんな事をコラムに書いている最中に、東日本の地震と津波、原発事故の報道がありました。今、大きな悲しみと不安が日本中を襲っています。当事者でないものは、被災された方々の心の痛みは、到底量り知ることなどできようはずもありません。でも直接の被災者でない私たちにこそできる支援をちゃんとする事、正しい情報を見極めることが大事なんだと思います。今はどうか一刻も早く被災された方々が安心して夜眠れるようになりますように、みんなが希望を持てる状況になりますように、と祈るだけです。（大西）

次回の『そんりさ』発送作業は　　月　　日（土）の予定です。
参加いただける方は連絡ください。
大変な作業も、みんなでやれば楽しくあっという間です。
レコム・メーリングリストのご案内：会員・購読者は無料で参加できます。
登録したい方は　E－mail : recom@jca.apc.org までアドレスを連絡下さい。

ホームページのご案内　レコムのホームページがどんどんリニューアル！
http://www.jca.apc.org/recom/

Vol.129　コロンビア政治状況の変化と行方
Vol.128　ペルー・バグア事件とその後
Vol.127　コロンビア先住民族少年マウロ
Vol.126　エクアドル・フェアトレード
Vol.125　ボリビア気候変動世界会議
Vol.124　ハイチ大地震特集
Vol.123　「やより賞」記念ツアー報告
Vol.122　グアテマラ視察報告

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。
入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。
レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員　年 8000 円（学生 5000 円）…会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円（一口）…資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者　年 4000 円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004
京都市西京区嵐山中尾下町 20-15　太田方
TEL&FAX　075-862-2556（留守電）
お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

＜レコム口座＞
27 万 8212 円
＜グァテマラ基金＞
18 万 6101 円
（2011 年 4 月現在）

発行　日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）　定価４００円